平成28（2016）年
2月1日
第177号 毎月発行
編集 公民館だより編集室
発行 西東京市公民館
毎月第４月曜日は休館日です

西東京市 公民館だより

今月号の内容

2面… 下野谷遺跡講座、現代社会を考える講座、ライフスタイル講座、編集講座、防災講座　ほか
3面… 文芸講座、谷戸市民映画会、利用者懇談会　ほか

柳沢公民館　柳沢1-15-1　☎042・464・8211　kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館　南町5-6-11　☎042・461・1170　tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館　芝久保町5-4-48　☎042・461・9825　shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp
谷戸公民館　谷戸町1-17-2　☎042・421・3855　yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館　ひばりが丘2-3-4　☎042・424・3011　hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館　東町3-14-30　☎042・421・1125　ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

持続可能な社会づくりと公民館の新たな可能性

昨年11月14日㈯に「ルネこだいら」（小平市）で、「公民館　その新たな可能性～東京発、戦後70年目の温故知新～」をテーマに、第56回関東甲信越静公民館研究大会兼第52回東京都公民館研究大会が開かれました。基調講演やシンポジウム、アトラクションなどが行われ、一都十県から約600名の参加がありました。西東京市からも、市民、公民館運営審議会委員、職員が参加しました。末本誠さんによる基調講演の一部を紹介します。

末本誠さん
湊川短期大学副学長・神戸大学名誉教授
フランスの成人教育史、成人の学習理論、沖縄の集落公民館、生涯学習政策論などの研究に従事。神戸大学では、神戸大学ＥＳＤ運営委員会委員長を務め、自らＥＳＤを実践してきた。

直面する課題 ～持続可能な社会づくり

巨大な台風やゲリラ豪雨など、私たちは生活の中で「持続不可能な現実」に出くわしています。このような地球環境の異変と私たちの暮らし方には因果関係があるといわれています。持続可能性という問題は、自然環境だけでなく、人権や平和、貧困、格差、ジェンダー、文化的多様性など様々な問題から構成される複雑な問題です。

「国連ＥＳＤ(※)の10年」（２００５年～２０１４年）で、国際社会は持続可能な社会を実現するための教育の推進に取り組んできました。しかし、問題はますます深刻になっています。

教育観をひろげる

持続可能性の問題は、人づくりの問題、教育の問題として考える必要があります。

出発は地球温暖化などの自然界の動きですが、人間との接点でとらえるとなると、人類が地球環境に及ぼしている影響は、非常に複雑で多様なものであることを理解し、異変に人類が責任を負っているという自覚を持たなければなりません。地球が長い時間をかけて地中にためてきた石油などの化石資源を消費して、人類だけが繁栄していく。そのような暮らし方を変えることを「持続可能な社会づくり」という課題は、私たちに課しています。価値観や生活態度を変えなければならないのです。

そのためには、人間は、新しい資質というか、能力を開発していかないといけません。例えば、「当事者性」。自分もその問題にかかわりを持っている、人任せにできないという意識ですね。相手の立場に立って見直してみるという「相互性」や、今、享受している生活の豊かさを後の世代にも保障するという「世代を越えた連帯」もそうです。

持続可能性の問題では、複数存在する原因がいろいろな形でかかわりあって、複数の結果となってあらわれています。一つの原因から一つの結果が生まれると考える従来の学問や科学には限界があります。知識を伝達するような教育は役に立たない。教育観を変えなければなりません。価値観や生活様式を変える必要がある問題は、一人一人の中にある不安とか思いつきというものから出発しなければ解決できません。言葉にならない、言葉以前の心の中にある感じ、不安とか疑問、そういうものを形にしていくことが大事です。それに対応できる教育の場が求められている。それは、学校の外にある教育的な可能性ですから、ノンフォーマル教育、日本でいえば社会教育です。

複雑な課題に取り組んでいく上で、みんなが集まって、個々の知識や経験を交流して、自分たちが何をやろうとしているのかということを互いに深く知り合う。そして、次の新しい動きを生みだす。そういう活動の拠点は何かといえば、公民館です。

公民館の可能性と課題

公民館は、ＥＳＤにとって重要な役割を果たします。そのためには、持続可能性の問題を地域の課題として読み解く必要があります。価値観を変える必要がある身近な問題に目を向けることによって、地域社会の持続可能性というところから大きな問題にアプローチしていくことができるはずです。

持続可能性の問題は、複雑であるだけに切り口が多様で、多様な当事者（ステークホルダー）が存在します。公民館も地域のステークホルダーの一員として、一緒にやるという姿勢を持つ。それによって公民館も発展するし、地域の様々な取り組みも総合されて地域的な力として展開していくことができるはずです。

成人の学習の最大の資源は過去の経験であるといわれています。成人は、新しい知識をそれまでの経験によってふるいにかけ、生きる中でつくってきた物事の理解の枠組みに合ったものだけを受け入れるのです。つまり、市民は、すでに知識、知恵をもっている。疑問に対して自分の答えを持っている。そういう答えの種のようなものを寄せ集めて、さらに大きなものにして花を咲かせていく。そういう役回りが必要になっています。

地域社会は課題のるつぼです。直面する問題を解決しようとする繰り返しが日々の暮らしではないでしょうか。その中で、いったん立ち止まり、そこに「学ぶ」という経験を差し込んだ時に、今日の自分は昨日とは違った自分になっている。それによって、課題解決の実践がよりよいものになっていく。そのような場を提供するのが公民館です。

ＥＳＤは公民館の出番です。ＥＳＤの拠点としての当事者意識をもって、取り組みの渦の中に自ら巻き込まれていく。そのことが、新しい公民館の可能性を開いていきます。

※ＥＳＤ
Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）の略

わが街をもっと知りたくて
私のつながりの原点
島田俊子さん（81歳）

スケッチブックを広げると大きな蜘蛛（くも）、カマキリ、そして四季折々の色鮮やかな季節の花々が描かれています。「近くにある多摩六都科学館の広場で描いたものです」と話すのは島田俊子さん。先天性疾病により車いすの生活を余儀なくされていて、芝久保町に住んで五十年以上になります。

「私の今の生活の基盤は、多摩六都科学館と芝久保公民館です。多摩六都科学館は散歩に最適な自然を生かした庭園でもあり、コミュニティの場でもあります。職員さんや訪れる人との交流が生きがいになっています。また、公民館は自分をひろげる触れ合いの場であり、教養の場となっています」とにこやかに話します。絵の活動を通して仲間ができ、陶芸への興味も生まれました。また、新たに車いすダンスなどに挑戦したいと思っています。それだけに、公民館や多摩六都科学館を知らない人が意外に多いことを残念に思っています。

島田さんの行動範囲は広く、小樽への墓参り、都心で行われる展示会などに電動車いすを駆使して単身で出かけます。行きたいところに行くために、自分ができることを最大限考えて行動します。それが、毎日をエンジョイする姿勢の原点です。